

Title	A.D.リンゼイの政治思想：近代デモクラシーとプロテスタンティズム
Author(s)	豊川， 慎
Citation	2010 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3795
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2010 年度

博士論文要旨
(指導教員 大木英夫教授)

A.D.リンゼイの政治思想
—近代デモクラシーとプロテスタンティズム—

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 108DC004 豊川慎

本研究はスコットランドのグラスゴー出身のイギリスの政治哲学者、道徳哲学者であり教育者のアレクサンダー・ダンロップ・リンゼイ(Alexander Dunlop Lindsay, 1879-1952)の政治思想、とりわけデモクラシー思想を明らかにしようとするものである。

リンゼイは主著『近代デモクラシー国家』(*the Modern Democratic State*, 1943)において「近代デモクラシーはピューリタン・コングリゲーションの経験から始まった」と述べ、近代デモクラシーの源流を17世紀イングランドのピューリタニズムに見出した。本研究ではこれを「リンゼイ・テーゼ」と呼び、このテーゼの内実を明らかにし批判的に再検討することによって、リンゼイのデモクラシー思想の特質、意義、そして課題を彼が活躍した20世紀前半の歴史的かつ社会的文脈のもとに明らかにすることを試みる。とりわけリンゼイの政治思想の根底にあるキリスト教思想との関連でリンゼイのデモクラシー思想を考察することを通じて本稿は近代デモクラシーを基礎付ける自由、人権、宗教的寛容、信教の自由、教会と国家の分離などの社会的・政治的価値あるいは文化価値概念の展開に対してキリスト教が歴史的に果たしてきた役割を再考し、近代デモクラシーの宗教的基盤であるキリスト教、特にピューリタニズムを含むプロテスタンティズムの役割や意義を批判的に考察する。そしてこのことは日本のデモクラシーのさらなる成熟のためにも依然として重要な課題であり続けているということをも本研究は明らかにしている。

序章「リンゼイ研究の意義」においてはまず近代デモクラシーの淵源をピューリタニズムに見出したリンゼイのデモクラシー思想をキリスト教全般にわたるより広い文脈の中で位置づけるためにも、ジョン・ウィッテ(John Witte)、ジョン・デ・グルーチャー(John W. De Gruchy)などの神学者によるデモクラシーに関する議論を手掛かりに近代デモクラシーとキリスト教、特にプロテスタンティズムとの歴史的かつ理論的相関性を考察する。また本序章ではリンゼイに関する国内外の先行研究を検討し、リンゼイがこれまでどのように評価されてきたのかを跡付ける。

第1章「リンゼイの生涯」においては、リンゼイの長女であるドルシラ・スコット(Drusilla Scott)による詳細な『リンゼイ伝』を主に参照しつつ、スコットランドのグラスゴーでの生誕からグラスゴー大学、ユニバーシティ・カレッジでの学生時代、ベイリオル・カレッジのフェロー時代、グラスゴー大学の道徳哲学教授時代、ベイリオル・カレッジの学寮長時代、そして第二次世界大戦以後の学者としてまた教育者としての生涯を概観する。

第2章「リンゼイのデモクラシー思想の背景—ピューリタニズムへの諸契機」では、リンゼイがT.H.グリーン(Thomas Hill Green)に始まるイギリス理想主義の伝統、特にイギリ

ス理想主義者たちのピューリタニズムへの関心にいかに関心しているかということを検討しつつ、リンゼイがそのデモクラシー思想を展開した時代状況について考察する。世界恐慌下での深刻かつ慢性的な労働者の失業問題などの社会経済問題や、全体主義国家の台頭の危機からの西欧デモクラシーの擁護という問題意識がいかに関心した彼のデモクラシー思想の根本にあったかということをも明らかにする。より具体的に言えば、1879年に生まれ、1952年に亡くなるリンゼイの生涯の間に、二つの世界大戦があり、第一次世界大戦には実際に従軍し、またデモクラシーを援護する論陣を張ることで政治思想的にもナチスの全体主義と闘った背景があった。また経済的な時代背景としては、1929年の世界恐慌時には英国も失業問題や労働問題がさらに深刻化し、国家がどのような役割を果たすべきなのかという問題意識の下、リンゼイは社会主義思想やいわゆる「社会問題」に取り組んだのであった。リンゼイはまた政治社会の形成に実際に参与するイギリス理想主義の知的伝統を継承し、特に功利主義批判の継承を通じてデモクラシーの基礎である宗教的基盤に基づく人間本性論を深く洞察していた。そしてそれらの諸要素はリンゼイが近代デモクラシーを論じるにあたってピューリタニズムに注目するようになった諸契機でもあったことを本章では論じている。

第3章「近代国家の形成過程—近代デモクラシー国家へ」においては、古代そして中世の時代から「近代国家」(modern state)がどのような過程を経て形成され、そして「近代デモクラシー国家」(modern democratic state)へと至ったのかということをもリンゼイの所説に沿いながら検討する。より具体的に言えば、ギリシャ・ローマの法思想やキリスト教の政治への貢献を検討し、「近代国家」とは区別される「近代デモクラシー国家」と何かといった問題を明らかにする。リンゼイによれば、近代国家は高次の自然法ないし道徳法に基礎を置くという中世の国家観を否定した。それにより主権原理をその特徴とする近代国家が誕生することとなった。イングランドやフランスに見られるように、近代国家は多元的であった中世国家を集権化し、絶対主義国家となった。しかしながら、リンゼイが「近代国家」とは区別する「近代デモクラシー国家」は「立憲（憲法）主義」(constitutionalism)と「多元主義」(pluralism)という中世の諸要素を再び取り入れたのであった。「17世紀の近代国家が拒否した西洋文明の遺産のこれら諸要素を近代デモクラシー国家は新たな形で復元したのであった」とリンゼイは述べたが、本章の最後ではこれこそがピューリタニズムが近代デモクラシーの展開に果たした一つの貢献であったことを論じ、この点に関して次章でさらに論を展開している。

第4章「リンゼイのデモクラシー思想とピューリタニズム」においては、リンゼイのデモクラシー思想の特質について、彼が注目した17世紀イングランドのピューリタニズムとの関連において考察している。リンゼイの『デモクラシーの本質』(*The Essentials of Democracy*, 1930)において明確に示されているように、リンゼイは、デモクラシーについての討議の重要性、デモクラティックな機構の目的の理解、野党の必要性、寛容とデモクラシーの関係、デモクラティックな社会における非政治的アソシエーションの重要性などを強調したのであるが、本章においてはリンゼイがデモクラシーの本質に関してピューリタニズムとの関連で注目した上記の諸点に焦点を合わせながらリンゼイのデモクラシー思想を詳述する。第1節においてリンゼイのデモクラシー思想における「コングリゲーション」(congregation)の意義と人間論を「科学的個人主義」(scientific individualism)と「キリスト教個人主義」(Christian individualism)という二つの個人主義に注目しながら検討する。第2節では「パトニー討論」(the Putney debate)に表出される「合意」(consensus)概念などをリンゼイのレヴェラーズ理解に注目しながら論じ、第3節では引き続きパトニー討論におけるオリバー・クロムウェル(Oliver Cromwell)に注目して「討議」(discussion)のデモクラシー論について、第4節では「立憲(憲法)主義」と「ボランタリー・アソシエーション」論、そして教会と国家の関係について論じる。

第5章「デモクラシーの二つの系譜」においては、アメリカのデモクラシーとフランスのデモクラシーという二つのデモクラシーをその相違性に注目しつつ、リンゼイのロックやルソー解釈に焦点をあわせてそれらの源流に遡って考察する。リンゼイは17世紀イングランドのピューリタニズムにおいてデモクラシーの諸原理が最初に表出されたと理解し、この17世紀のピューリタニズムからアメリカを経てフランス革命へとデモクラシーの諸原理が展開されたと考える。ドイツの法学者ゲオルグ・イエリネック(Georg Jellinek, 1851-1911)がその『人および市民の権利宣言』(1895年)において1789年8月4日の『人および市民の諸権利の宣言』(いわゆる『フランス人権宣言』)の淵源を北アメリカ諸州の「権利宣言」に見てそこに歴史的連続性を指摘したように、リンゼイもまたイングランドのピューリタンの諸理論とジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)の政治理論の連続性、そしてロックがアメリカのデモクラシーに及ぼした影響、さらにはイングランドとアメリカのそれら諸源泉が『フランス人権宣言』に及ぼした思想的影響の連続性を指摘している。つまりアメリカのデモクラシーとフランスのデモクラシーの歴史的淵源は遡れば共に17世紀のイングランドにあるとリンゼイは理解する。しかしながら、リンゼイは「イギリスおよび

アメリカの理論とフランスのデモクラシーの理論との間には甚大な相違があった」とも述べ、二つのデモクラシーの相違にも言及しているのである。そこで本章では 17 世紀のイングランドにデモクラシーの淵源を同じくするものの、その後の歴史の途上で分岐したこの二つのデモクラシーの系譜をリンゼイがどのように評価しているのかということを中心に検討を進めている。第 1 節では二つのデモクラシーについて、第 2 節ではリンゼイのロック論を中心にアメリカのデモクラシーを、第 3 節ではリンゼイのフランスのデモクラシー観を、そして第 4 節ではリンゼイのルソー論、特に「一般意思」(general will)の概念に焦点をあわせ、リンゼイが注目したルソーの一般意思とピューリタニズムとの関連を検討する。

終章の「「リンゼイ・テーゼ」再考—日本におけるデモクラシーの神学思想に向けて」では、これまでの議論を踏まえて、リンゼイのデモクラシー思想に対して批判的検討を行い、近代デモクラシーの淵源を 17 世紀のイングランドの「ピューリタン・コングリゲーション」における「宗教的経験」に見出した「リンゼイ・テーゼ」の意義を再確認する。。それにより、近代デモクラシーとキリスト教、とりわけプロテスタンティズムとの相関性を今後さらに再考していく上での課題を明らかにし、あわせて日本の戦後デモクラシーという継続的課題に対してリンゼイのデモクラシー思想がどのような意義をもっているのかを問い、日本におけるデモクラシーの神学の更なる展開のためにもリンゼイのキリスト教思想に基づくデモクラシー思想が日本においてどのように生かされるべきなのかを再考し、本研究の結びとする。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 108DC004 豊川慎